
幼馴染一番外編

零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染ー番外編

【Nコード】

N0374B

【作者名】

漣

【あらすじ】

この前の小説、幼馴染を読んでる人は分かると思います。幼馴染のあみを好きになるまでの事と中学校生活の事を書いていきます

第1話・・・新たな生活

あゝ・・・眠い。。。

「もう7時50分!!!」

今日入学式なのに・・・

初日から遅刻かも。。。

この話しの主人公

坂嶺濤「サカミネ レイ」

今日は中学の入学式!!

学校に行く気はないけど、どんな奴がいるか見るために学校に行く
つもり

遅刻しそうでちょっとバタバタしてる

チョー最悪

「マジ寝み〜」

「濡やっど起きたか！お前が学校行くとはな（笑）」

親父はタバコを吸いながら俺に言った

「まあ俺はマジメだからな！！」

「俺の子だからマジメはありえねえよ！！」

入学式からそんな格好で行くんか！？さすが俺の息子やね！」

親父は高校も行ってなく族だったし今はヤクザみたいな・・・（苦笑

俺の格好はズボンは普通に腰だし・・・ってかそれ以上上げたらキモ
イっしょ

髪は金に近い色でピアスも付けていた

俺が玄関から出ると

「濡〜遅い！」

「誰かと思っただ〜〜あみかよ」

俺に声をかけたのはあみだった

あみとは小さい頃から一緒だった

あみの親父と俺の親父が仲が良くずっと遊んでいた

小学校の時も家が近いのもあり一緒に行っていた。
学校に行く事は少なかったけどね！

「ねえ滞・・・初日からそんな格好なわけ目付けられるよ」

「そんなのどうでもイイゝあみだってそれなりの格好してんじゃん。
」

あみは自分の格好を見ていた

あみの格好はスカートは短く髪はゆる巻きで茶。
ピアスをしてて、ちょい化粧をした

「そんな事より学校行こうゝ遅刻するし!!」

「そうだな!!」

周りから見たらカップルのようだが俺は好きっていう気持ちは少しもなかった。

俺達は急ぎぎみで歩いた

――学校の正門――

学校に行くと、いつもつるんでいるダチが8人立っていた

そういつらも俺と同じ様な格好をしてた

いつも遊ぶ時は一緒にいる榎本翔汰「エノモト ショウタ」

いかにもチャラそうなのが赤坂誠「アカサカ マコト」

喧嘩が強そうだけどそこまでのない（笑）坂山秀仁「サカヤマ シュウジ」

可愛い顔をしてる加東鈴乙「カトウ レオ」

ばっちりギャルメイクなのが内山愛「ウチヤマ アイ」

ヒップホップダンスをしてる杉山ありさ「スギヤマ アリサ」

モデルっぽいのが武井彩耶香「タケイ サヤカ」

ヤンキーっぽい下川里奈「シモカワ リナ」

周りの奴等は俺等を見て怖がっていたのか俺達の近くを通る人はいなかった

正門に立っていた中学生の奴等も俺等を見ながらヒソヒソなんか言っていた

俺等はその事は気にしないで学校に入って行った

学校に入るとクラスわけの紙が貼ってあった

「俺翔と一緒にじゃん!!」

俺と翔汰とあみは一組

ありさと里奈が二組

愛と鈴乙が三組

秀仁が四組

彩耶香と誠が五組

綺麗に皆わかれた。。。。

第2話・・・入学式

―――入学式前―――

俺達3人が教室に入ると先生が立っていた

先「お前ら3人とも明日は髪、黒にしとけよ!!」

そんな事俺に言っても無駄ですよ

「なんで滞ったら入学式サボルのに今日どうしたんだよ!？」

「なんとな〜く〜く! (笑) どんな先輩がおるか気になるし!! 可愛
い奴がいるかも!!!! (笑)」

俺はそんな事を思いながら自分の席についた

俺は1番後ろの席だった。。

翔汰は俺の前の前で、あみが翔汰の隣だった

2人は仲良く話していた。

俺の前にはオタクっぽい奴だった

先「廊下に並べ」

先生は皆をあ・い・う・え・お順に並べた

俺等は体育館に着くまでずっと話してた

―――入学式―――

「やっぱめんどい・・・寝みし!!」

「だからサボろうって言ったのに滞が・・・」

「そこ静かにせんか!!!!」

「ウゼ。。。。。」

俺等は目立つのか先輩達から見られてた
知ってる先輩も何人かいた

入学式が始まると長い校長の話しが始まった

俺は今日早く起きた事もあり寝た

――10分後――

俺が起きると一緒に隣にいた人が話しかけてきた

「ねえ名前なんていうの??俺は慎よろしく」

そいつは植村慎って名前らしい・・・
見た目は思いつきりギャル男ぽかった

「俺は滞よろしく」

俺が挨拶すると慎は笑顔になった

まあ俺の周りに居そうな感じの奴で入学式が終わる前に仲良くなった

――入学式後――

体育館から出て慎の事を2人に紹介した

俺等は体育館から出て靴箱に行った

「慎じやゝな！俺達もう帰るから」

「マジで！！分かったバイバイ」

そのまま靴を履き正門に行った

第3話・・・今までの恋愛

――校門――

3人が正門に行く

ありさ・里奈・彩耶香・誠が立っていた

滯は誠の所に行った

「他の奴まだ来ないん？」

「まだ来てない。。あつ来た来た」

玄関から愛・鈴乙・秀仁が走って来た

「よし行こう」

校門を離れようとした時後ろから声がした

「お前ら待て」

バタバタバタ・・・

走ってきたのは俺の担任の松・・・

なんだっけ?????

松・・・松・・・松谷だ!!

俺等は慌てずもせず歩きだした

「まずタバコ買いに行きたいんだけど・・・!」

「濡ってすぐタバコ無くなるよな!」

話していると走ってきた担任があみを捕まえていた

「お前ら入学式からこんな事していいと思ってるのか!! (怒)」

これだから先生って嫌いなんだよ!

俺は担任の所へ行った

「離せよ!! 女に触るとか変体!!!!!!」

担任が手を離れた時に俺等は歩きだした。。

担任が見えなくなった時に携帯がなった。。

チャララゝ

――受信メール 1件――

――

慎

――

さっそくメールしたぞ！

先生にばれんやった？？

っていうか濡ってカッコエエよな

彼女おるん？？

――

この時俺は付き合ってる人もいないし好きな人もいなかった。。

――送信メール――

いないよ

――

俺はメールするのが、めんどくさくなり携帯を閉じた

俺は今まで何人かと付き合ってきた

皆マジ好きで付き合ってた

でもマジだったわりには別れた時そこまでショックはなかった

本当にマジではなかったな！と今思う

俺がマジで恋愛する人は最初から、あの人に決まっていたんだと思う

第4話・・・悩み

俺はタバコを買って、いつも溜まるコンビニに行った

漣「俺等ってここしか来るとこないよな」（笑）

俺が話していると隣から視線を感じた

隣を見るとあみがいた。

漣「あみ俺の顔なんかついてる??」

「ついてないよ」

あみは驚いたように下を向いた

漣「もしかして見とれてた・・・？」

「・・・」

あみは落ち込んでいるような顔だった

俺はその時のあみの気持ちを全然知らなかった

俺はコンビニに入りジュースとあみの好きなお菓子を買って外に出た

漣「あみく何があったか知らんけど、これあげる！」

俺はさっき買ったお菓子とジュースを渡した

渡した途端あみが泣きだした

俺はどうしていいか分からなかった

今まで、あみと一緒に居た時間は他の誰よりも長い
なのにあみがこんなに泣いた所は見た事が無かった

愛達は泣いたあみを連れてどっかに行った

「俺等どうする??」

俺はなぜあみが泣いたのかが分からなかった

漣「翔、俺なんかした??」

「分かんない!!」

俺等に行く所もなく解散する事にした

俺が家に帰りベッドで寝ようと思ってる携帯がなった

――受信メール――

――

あみ

――

今日はゴメンね・・

気にしないでいいから

お菓子おいしかったよ（＾－＾＊）

濡もこの頃悩んでるみたいだから相談してね！

――――――

「元氣そうじゃん！良かった・・・」

俺の悩んでる事それは親の離婚。。

それとあと1つ

あみにも親父にも言っていない

クスリ・・・

俺は親の離婚の事を聞いて悩んでる時に先輩と会いクスリとも出会った

俺は何回も止めようと思ったけど止める事が出来ずにいた。。

今日も朝からしていた

自分が始めたから自分が悪い

それも止めたくても止められなかった・・・

俺は止めれなくてムカつき、それでまたクスリをする。。

それが今の俺だった・・・

その日の夜、俺はまた先輩の家に行った

第5話・・・事実

ピンポーン

俺は先輩の家のインターホンを押した

先輩はすぐ出てきた。

滯「ちわ〜」

「おう早く入れよ!!」

そう言われて俺は家の中に入った

滯「先輩今日疲れてるんでクスリしたら帰りますわ!」

俺は久しぶり学校行った事もあったし入学式があって疲れてた

「そうか!分かったならさっそくするか。。」

俺はクスリがきれていたからカイライラしてた・・・

俺は先輩から袋をもらい口に近づけ吸った

漚「マジ気持ちい〜!」

俺はイライラしてた事も忘れるぐらい吸った

ピンポーン

インターホンがなった。。

「今日はいつもより客がくるな」

誰か来たらしい俺は何も考えず吸う事にした

先輩は玄関で話してるようだった

先輩が走って俺の所に来た

「漚・・・や・・・ろ。。漚やめろって!!」

俺はクスリが効いていてボーとしてた。

そんな俺に声が聞こえるはずがない!

すると先輩の後ろの方から俺等の方に誰か来た

俺が見えたのは男と女2人だった

その男は俺に近づき俺の胸倉を掴んだ

俺は意識がないまま、その男にガンつけていた

俺は何が起きたのか分からなかった。。。

男は俺に何か叫んでいた

その後ろでは女が泣いていた

そんな状態が30分ぐらいなつた頃俺は少し意識がしっかりしてた

そして俺の胸倉を掴んだ男と泣いてた女の顔が分かった

そこに居たのは翔汰とあみだった。。。

見られたくない奴に見られた

俺は2人に何も話さず家から出て自分の家に向かった

後ろからは2人が走って俺の方に来た

「滯・・・」

あみが俺の手を掴んだ

滯「何」

「あのね・・・」

俺の手を掴んでたあみの手が震えてた

漣「なんだよ!!」

俺は強い口調で言った

「あのねゆっくり話したい」

漣「何なの・・・？」

俺はイライラしてた。。。

「あの・・・」

あみは下を向いた目からは涙がこぼれてた

漣「あのくなんで泣いてんの？」

漣「俺疲れたからもう帰るね。。」

俺はまた歩きだした

ギュッ。。。。

後ろからあみが抱き着いてきた

俺は振り返った。。さっきまで居た翔汰の姿はなかった

滯「どうかした。。？」

「どうかしたじゃないよ!! クスリしてるよね!？」

滯「してるよ。。俺の事最悪な奴って思ったでしょ。。」

まじキツイ・・・寒いし!!

滯「俺んちで話す?？」

無言のまま家に行った

第6話・・・気持ち

家に着きあみをソファーに座らせた

親父は帰ってないのか家の中が静かだった

あみに話した方がいいのか分からなかった・・・

「ねえ何でしたの・・・」

あみが口を開いた

澤「忘れたかったから。。。離婚の事」

「だからって・・・」

澤「俺な最初は離婚なんてどうでも良かった

でも母さんが出て行った後、なんか悲しくなってさ・・・

俺を産んだ親だし・・・俺がまだ小さい時親父は遊び行って寂しかった

でも、そんな時はいつも母さんが隣に居た・・・」

俺は喋りながら泣いていた。。

こんな事で泣くとは思わなかった

「無理しなくていいんだよ！今からは私が隣に居るから」

漚「なんで・・・そんな優しくすんの！？俺の事スキでもないのに、なんで・・・？」

「だって漚の事がスキだから・・・」

えっ・・・！！

あみが俺にそんな感情を持ってるなんて知らなかった

漚「嘘でしょ。。。」

「なんで・・・スキじゃなかったら漚の事心配しないよ！」

俺はあみにそんな感情を持った事はなかった

俺はあみの事スキなのかな？？

好きでもない。

でも・・・

一緒に居たい。。。

俺があみを見るとあみが泣いてた

漚「なんであみが泣くの？」

「分かんない・・・でも・・・」

漣「俺、クスリやめるから泣くなよ・・・」

俺は泣いてるあみを、ほっとけなかった。

「・・・ゴメンね」

漣「なんであみが誤るんだよ!! 悪いの俺なんだから・・・あみ明日学校だから帰れよ! 送るから・・・」

「どうせ学校行かないから。。それも漣を1人に出来ない」

漣「分かった。。なら寝よう」

俺とあみはベッドに入った。

一緒に寝るのは始めてだった

俺はドキドキしてた

あみにドキドキした事はなかった。。

これって・・・・・・

好きなのかな?!

俺は疲れてて寝てしまった

第7話・・・過ち

この日から毎日あみは俺のそばにいた

あみは俺の事を好きって言ってから明るくなっていた

あれから2週間、俺は全然学校に行ってなかったしダチとも会ってなかった

俺は今日あみに翔汰と一緒にいるって言った。

あみも翔汰とならいいと言ってくれた

俺は歩いて行った。

10分たって着いたのは翔汰の所ではなく先輩の家だった

滯「ちわ〜」

「滯! ! 久っ」

俺はこの2週間あみという全然クスリに手をつけてなかった

「クスリしにきたんだろ! ? お前が来る時はそれしかないからな」

滯「先輩、それと俺の頭の中クスリしかないって感じじゃん」

「だってそうじゃん(笑)」

漚「まあそうだけど。。（笑）」

「はいっ」

先輩は俺に袋を渡した

俺はそれを受け取った。

でも俺の頭には、あみの顔が出てくる。
なんで俺あみの事考えてるんだろう・・

俺は、あみの事を考える事をやめクスリをした

久しぶりに吸った葉は気持ち良かった。

俺は吸った後すぐに翔汰の家に行った

「漚、あみから朝電話あったけど今までどこ行ってたん？」

漚「・・・・・・・・・・」

俺は否定したくても否定出来なかった

「またしたのかよ・・・」

漚「俺だってやりたくねえよ！あみの顔は出てくるし意味わかんねえ」

俺が言い終わると翔汰は誰かと電話してた

電話を切って5分ぐらいたった頃あみが来た

2人は玄関で色々話してるようだった

「漣く」

そう言っであみは部屋に入ってきた

俺はあみに翔汰の家に来るまでの事を聞かれそうに怖かった

漣「俺外でタバコ吸ってくる」

俺は逃げるように外にでた

俺はタバコを吸って部屋に戻ると、あみの顔が違った。

「ちょっとは反省したら・・・」

「あみ、漣にそんな事言っても無駄だよ」

「もう漣なんて嫌い・・・」

えっ・・・！！俺はショックだった。

漣「ごめん・・・俺たぶんあみの事スキ。でも今の俺には付き合う資格ないから

俺が辞めたら付き合おう。それまで俺と傍にいて」

俺は自分の気持ちを伝えた・・・。

「うん。いつまでも傍にいるよ。今クスリ持ってる？」

漣「持っていない!!」

もう辞める事にしよう

俺の体だけでなく、あみや翔汰も傷つけてた。

俺も辛いけど、それ以上に俺の事を好きな、あみが辛いのに・・・

第8話・・・別れ

――夏休み――

あれから3週間たち夏休みになった。

夏休みの初日はあみと遊ぶ事にした。

俺はあの日から毎日あみの事を考えてた

漣「どこ行きたい？」

「どこでもいいよ」

漣「どこでもいいって・・・」

「ならカラオケ行って～ご飯食べてプリクラとる!!」

漣「よし!!今日は俺がおごってやるよ」

「やった」

あみは笑顔で俺に抱きついた

俺はドキドキしてた・・・

俺はあの日からクスリを辞めようとした・・・

でも・・・

3日1回のペースでしていた。

誰にも言ってなかった

俺は最低な男だった……。

好きな女と約束したのに・・

だから今日はケジメをつけるために、あみと遊ぶ事にした。

周りから見たらカップルだけど・・

今の俺にはあみの彼氏になる資格はなかった。

俺とあみはいつも行くボックスに行った

――カラオケ屋――

「濡何のむゝ？」

濡「コーーラー！！」

「濡ってコーラ好きよね」

俺はあみがジュースを取りに行ってる間に俺は曲を入れて歌った

あみはアユを歌っていた。

漣「ねえ、安室ちゃん歌って！」
俺は安室が好きだった

「分かった」

――2時間後――

漣「あみ歌うまいよね」

「はっ！漣とか歌手並みに上手いじゃん」

漣「まあね！（笑）」

俺はあみの計画どおり飯を食いに行った

俺はカルボナーラを食べ、あみはペペロンチーノを食べた。

2人はお腹いっぱいになりレストランから出てゲーセンに行った

2人はプリクラ機に入った

「漣もうちょっと近づいてよ！」

俺は恥ずかしくて、あみから離れてた

「何照れてんの！？（笑）」

漣「照れてないし!!」

「顔真っ赤（笑）」

俺は両手で顔をおさえた

漣「あゝゝゝマジはずい。。。」

「早くゝゝ」

あみは俺の手を握り近づけた

それと同時にフラッシュが光った

プリクラを撮り終わったあみの顔は楽しそうだった。

漣「楽しかった!？」

「うん! かなり楽しかったし。。」

漣「良かったゝあのさゝ次は俺に言う事聞いてゝ」

「えっ。いいけど何？」

漣「昔行ってた公園行こう」

俺は小さい頃毎日あみと遊んでた公園に行く事にした。

公園に着き2人はベンチに座った

漚「ねえ今だけ手繋がせて」

「うん・・・」

俺はあみの手を握り正面からあみを見た

「どうかした・・・？」

漚「ちょっとあみに話す事があって」

「何？」

漚「あのね、俺まだ・・・クスリ・・・やってるんよ。」

「はっ意味分かんない！なんで・・・約束したのに。。」

あみは立ち上がり歩き出した

俺はあみの手を握りベンチに座らせた

あみに話を聞いてほしかった

あみは泣いていた

漚「あのな、俺あみの事本当に好き！！」

で、本当にクスリ辞めようと思った・・・けど無理だった」

「・・・グスッ」

漚「俺を警察に連れて行ってくれ」

俺が出来る事はこれしかなかった

「え……。嫌だよ。」

滯「でもこのままじゃ俺……」

「私も頑張るから一緒に居て！そして辞めたら付き合っ
てよ。約束したじゃん」

滯「もうあみには迷惑かけられないんだよ……」

俺は本当にあみの事スキだよ」

「迷惑なんて思っ
てないよ。私も滯の事好きだから」

滯「なら俺のためにも警察連れて行
って」

あみは声を出して泣いていた

俺はあみを力強く抱きしめた

俺は明日警察に行く事を決意した

――次の日――

昨日俺はあみを家に送った

あみはずっと泣いていた……

そして俺は家に帰りあみに手紙を書いた

今日は警察に行く

あみの家に俺が行くとあみが外で待っていた

あみは昨日泣いてて目が腫れていた

漣「あつついな〜」

「そうだね」

あみは元気がなかった。

漣「あみ目腫れたな〜」

俺は優しくあみの目を触った

あみは今にも泣きそうな顔をしてた

漣「泣くなよ〜俺まで泣きたくらるから!」

「うんゴメン」

漣「謝んなくてもいいけど・・・行くか!」

「漣、向こうに着くまで手繋いで。」

俺は優しくあみの手を包んだ

警察に行く途中、翔汰の家がある

翔汰の家に近づいた時人が見えた

そこに居たのは翔汰・鈴乙・秀仁・誠・ありさ・里奈・愛・彩耶香がいた。

「昨日電話したんだ」

あみは全員に連絡した。

全員話しはあみに聞いたらしい

翔「お前が決意したんだから頑張れよ」

滯「おう！ゴメンな・・・」

誠「謝んなよ」

女達は泣いていた

俺達は全員で警察署まで行った

着くと一緒に俺はあみを呼んだ

滯「あみ。俺ちゃんと辞めれるように頑張るから」

「うん！絶対やめてね。私待ってるから」

滯「・・・」

「どうした・・・？」

滯「俺の事・・・待たなくていいよ。」

俺の事忘れて好きな奴作って幸せになれ！」

俺は今にも泣きそうだった

「嫌だよ・・・」

滯「ダメだって俺を思ってたら幸せになれないし、いつ帰れるか
分かんないから・・・」

俺はあみを抱きしめ笑顔で好きって一言いった

俺はこの日から、クスリとあみの事を好きだった事を忘れる事にした
俺の中から、あみの存在はいつまでも消えないと思う

俺はあみに昨日書いた手紙を渡した

俺は歩きだし、歩きながら泣いた

後ろからは皆が叫んでた

あみの声は聞こえず泣き声だけが聞こえる

「あみ幸せになれよ！！！」

俺があみに渡した手紙は。

|||||

あみへ

こんな俺を好きになってくれてありがとう

俺、あみの事沢山なかつたよな・・ゴメンな！

あみが居たから俺は警察に行く事にしました。

もし、あみが居なかったら俺は今もつと危ない状態になってると思うし生きてなかったかもしれない。

俺は本当にあみに出会えた事えお感謝します

俺の本音はね帰ってくるまで待っててほしいよ。

でもね俺を待ってたら、あみが幸せになれないと思うんだ

だから他の人を好きになってくれ！

俺はあみが幸せになっててくれれば、それでいいから。。。

あみ、ありがとう。ありがとう。ありがとう

言い切れないほど感謝してます

ずっと俺の隣に居てくれてありがとう

おれ、漣はあみの事を心の奥から愛してます

漣より

――――

俺はこの手紙を書いてる時泣いた・

今から新しい時間の始まりだった

第9話・・・怒り

警察に行き少年院そして施設に入る事になった

そこではクスリの事を学んだりした。

俺的には学校みたいでつまらなかった・・・。

いつもその時間は寝ていた。体育の時間は気合が入っていた

施設に行き始めてクスリも1回もしてなくタバコも吸えなかった
タバコぐらいいいと思うけど・・・

俺はイライラして喧嘩を売ったり壁を殴ったりする事があった

施設に来て2週間たった時あみから手紙がきた

俺はその手紙をもらい棚に入れた

理由はたった1つ！あみを忘れるために・・・

それから2日後、施設に新しく誰か来た

そいつは俺とタメで同じ部屋だった

そいつの名前は鈴木悠馬「スズキ ユウマ」見た目はヤンキー系だった。

悠馬は俺と似てる所もあり、すぐ仲良くなった

「ねえ漣って好きな奴とかおる!？」

俺はドキッとした。その瞬間あみの顔が浮かび上がった

漣「あゝどうだろ? 悠馬は??」

「好きな奴おるよゝ! だから早く帰りてえ!! 俺教えたから教えろよ」

漣「好きな奴はおるけど・・・」

俺は悠馬に今まであった事を全部話した

俺があみを好きになった事、最後に遊んだ時の事、そして・・・今諦めようと思ってる事を・・・

悠馬は全部聞いてくれた頷きながら。

「漣それで諦めるん!？」

漣「そうするつもり・・・」

「俺は無理に諦める必要はないと思う。だってもし彼氏が出来たら嫌だろ」

俺はムカついた! 俺の気持ちを分からないくせにそんな事を言う悠馬に!

漣「おめえーなんかに何が分かるんだよ」

俺は走って人通りが少ない階段に行った

俺はその場で泣き崩れた

俺だっつてあみの事諦めたくねえよ

でも・・・しょうがないんだよな。でも・・・

今まで恋愛してきて泣いたのは、あみだけだった

俺はあみが好き！大好き

俺は知らない間にあみのこんなに好きになっていた

漣「早く帰りて〜」

今頃あみは彼氏といえるのかな・・・？

彼氏がいても俺は好きでいよう！

そんな事を考えてると手紙の事を思いだした

漣「見てみようかな？悠馬にも謝らないと・・・」

俺は立ち上がり服の袖で涙を拭って部屋に戻った

ドアを開けて部屋に入ると、そこには悠馬が正座して待っていた

「漣！！ごめん。。。俺なんも考えてなくて・・・」

漣「俺こそゴメンな・・俺考えたけど、あみの事が好き

だけど、もし彼氏が出来てたら応援するつもり・・

あみが幸せだったらそれでいいから。。

ってかなんで正座！？（笑）」

「だって反省と言ったら正座かと思って・・

漣頑張れよ！！俺は漣を応援するから・・」

悠馬は、あぐらを掻いた。

足がしびれてたらしく痛がっていた。

そんな悠馬を見ながら笑った

第10話・・・手紙

俺は友達が出来た。

皆どう見てもヤンキーっぽい奴等ばかりだった。

なんか分からないけど施設では怖がられる存在になっていた

施設に入って5カ月たった今日はクリスマス。

5カ月たった今でも手紙は開けていなかった

今の俺にはまだ勇気がなかった

クリスマスという事で好きな物をもらえる事になった

俺は久々にタバコが吸いたくなった

俺は紙にタバコと書いて渡した

案の定タバコはダメだと断られ書き直す事になった

漣「タバコしかないっつうの!!」

悠「もう一回タバコって書け!!」

漣「いいねっそれ」

俺はもう一度タバコと書いて渡すと怒られた

漚「も～～セットアップでいいや」

悠「なんでセットアップなん？」

漚「なんとなく・・・」

俺等は頼んだのを待っていると、施設で1番若い野田さんが俺の所に来た

「お前タバコ買ってきてやったぞ！！絶対内緒だからな・・・ばれんなよ！！！」

漚「マジで！！サンキュー」

俺は窓を開けタバコを吸った

漚「いいね～やっぱタバコはいいよ！」

トントン・・・

ドアがノックされた

俺は急いで消し棚の中に入れドアを開ける

「持って来たぞ！！」

漚・悠「あざ～～す！」

「食堂にケーキを用意してるから食べに来いよ」

俺はいつものメンバーで食堂に行った

ケーキを食べ終わると野田さんが俺を呼んだ

そして会議室みたいな所へ行った

「濡はクスリする事もうなくなったな」

濡「だってマジ辞めたいから！」

「濡は症状が悪くなる前に来たから早く出られるかもな・
でも早くても1年はいないといけないけど（笑）」

濡「それって長くねえ〜〜最悪！」

俺は話を終わると悠馬がいる部屋に戻った

俺はタバコを吸うために棚を開けると、あみの手紙に目がいった

濡「読もうかな〜」

今なら読める気がした。。。。

手紙を手にとり紙を開く

| | | | | | | | | | | | | | | | | |

濡へ

濡と別れた後すっごい泣いたよ〜

離れて滯の存在がとても私に大事な事が分かったよ
でも今は彼氏が出来ました

まだ気持ちは滯かもしれないけど私頑張って忘れるから
私も滯の隣に居れてとても嬉しかった

本当にありがとう。。

大好きだよ

あみより

――――

俺は手紙を読んだ後動けなかった

彼氏がいたら応援するつもりだったけど実際になると悲しかった

でもあみの手紙は涙で濡れた後があった

あみも辛かったと思う

俺はこの日、手紙を持ってベッドの上で悠馬にばれないように泣いた

あみ・・・

こんあ辛い思いさせてゴメンな。。。

今頃後悔しても遅い事は分かってるよ

俺もあみの事諦めたい

でも無理だよ・・・

俺はあみに彼氏がいても好きな気持ちは変わらないから・・・

あみ大好き。。
。

第11話・・・やっと

朝目覚めると部屋には誰もいなかった。

俺は目が腫れている事に気付き氷で冷やした

漣「はじく目腫れてるし!!」

俺は目の腫れがひいて外に出た

悠馬達はサッカーをしてる

サッカーは俺達の朝の日課になっていた。

悠「お前起きるのおせえんだよ!」

そう言いながら俺にパスしてきた。

漣「ゴメンゴメン!!」

俺達は疲れて近くにあったベンチに座った

漣「思ったけどさサッカーが似合う男と思わん?」

悠「はっ誰が!?!」

漣「俺が!!!!!!」

皆は笑いだした

「漣さゝ行動とか言葉はカッコイイけど顔は可愛いよな（笑）」
ダチの1人の仁が言った

皆は頷いていた。

漣「最悪さゝ俺可愛いって言われるの嫌いなんだけど・・・」

俺は可愛いって言われるのが1番嫌だった

悠「まあ漣はカッコイイよ！女にもバリバリモテルし！」

俺は悠馬を抱きしめた

悠「キモさゝさゝイ！」

俺達はいつもこんな会話をしてた。

1112004年12月31日1111

俺達はクスリの授業も終わり風呂に入って皆はテレビを見た

テレビからはカウントダウンが始まった

テ「2005年まで5・4・3・2・1・・・」

「Happy New Year」

漣「あけちゃいましたね（笑）もう2005年やん！」

俺達はこっそり抜け出して取ったチューハイを開け飲んだ

仁「今日は幸せですな〜」

皆は酔い始め寝始めた

俺は皆の飲んだ缶をバレないように捨て、俺は寝た

俺と一緒に居るダチは皆を辞めていた

4月になり施設に来て10カ月たった。

野田さんは俺に完全にクスリ辞めたけど今からしないか心配だからあと2ヶ月はここいいないといけないと俺に言った

ちょうど施設に入って1年たった2005年7月21日に出来るらしい・・・

どんどん施設から出れる日に近づく

施設から出れる1週間前、翔汰に電話した

本当に久しぶりに翔汰の声を聞くのもあってちょっと緊張してた

プルルル〜プルルル

濡「もしもし濡やけど・・・」

「滯?・・・」

翔汰はビックリしたようだった

滯「おっい大丈夫か!？」

「ゴメン!!ビックリしたっ久しぶりやな!」

滯「おう久しぶりっ!あの俺あと1週間したら出られるから。」

「マジで!!やった皆に伝えなきゃ」

滯「伝えんで!!他の奴ビックリさせたいから(笑)」

本当はあみに伝えてほしくなかったから。

「そっか!滯がその気ならそうするわ。ってか早く会って」

滯「キモっい!!あっそうそう帰って来た日家行くから!」

「キモイって・・・!!分かった待ってるよ」

滯「あっゴメンもう電話きらん・・・また行く時電話する・・・」

「はいはい。じゃな!!!!」

俺は電話を切り

施設を出るための準備をした。

俺がここに来る事はもうない！！

それは言いきれぬ。

俺はこの日荷物をつめ寝た

第12話・・・帰宅

施設から前夜

悠馬や仁達とメアドや電番を交換した

悠「滯がいなくなると寂しいな」

滯「だろ！！やっと俺の存在が大きい事に気付いたか」

俺達は話したり暴れたりしながら最後の日を過ごした。

今までありがとう

お前らが居たから楽しかったし早く施設から出られたと思う

―――次の日―――

俺は朝7時に起き荷物を持って野田さんの所へ行った

「もう起きたのか」

滯「早く帰りたいからね！！」

「なら行くか」

俺は野田さんの車に乗った

漣「野田さん俺髪切りたいんでパルコ辺りまで乗せてください」

パルコ前に着き車を降りた

「もう施設には来るよな！」

漣「当たり前じゃん！今までありがとう。じゃね」

俺は右手で手を振り歩き出した

俺は髪を切り金髪にしてタバコを買い自分の家に行った

俺の家はマンションの5階の1番左だった。

家に近づき自分の家の方を見ると玄関の所に誰か立っていた

親父ではなく若い女だった

漣「誰だろ〜〜？」

俺は隠れて見てると、その女は鍵を出し家に入っていた

家に入った時見えた横顔は間違えなく、あみだった。

あみは俺の家の合鍵を持ってる

彼氏がいるあみが、なぜ俺の家にいるか疑問だった

でも俺はまだ、あみに会う勇気がなく翔汰の家に行った

ピンポーン

翔汰はすぐ出てきた

「おっ！ 滯！ 昔よりガラ悪そうやん（笑）でも顔は可愛いのに見た目は怖い」

なんで皆可愛いって言うにか分からなかった

滯「うっせーな！！ ばか。。」

俺は翔汰の家に入った

滯「今日おばさんは？」

「今週旅行でいないんだよね。。」

俺はタバコを取りジッポで火をつけタバコを吸った

滯「最近あちーよな！」

「そうそう！ 明後日さ皆で海行くつまりだけど行くやろ！？」

滯「そりゃ行くけど海パン買わなん」

「明日買い行こうぜ！ だから今日は飲みましょう」

俺は施設の事を色々はなした。

俺は睡魔が襲い目を閉じた

「・・・れ・・・い・・・」

漚「・・・ん・・・」

「漚!! お前ベッドで寝ろよ向こうの部屋使っていいから、そっちで寝ろ」

俺はその部屋に行き寝た

ベッドは懐かしく落ち着く香りがしていた。
俺はなぜか泣いていた。

この部屋は毎日のように誰か泊まりにくる

俺が気持ち良く寝ていると部屋のドアが開いた

そして寝ている俺に近づいて来た

部屋は暗く顔が見えなかった

誰・・・？

「グスッ・・・」

その人は泣いてるようだった

第13話・・・香り

漣「誰・・・・・・・・・・？」

「えっ!？」

その声はまぎれもなく

あみだった・・・

俺はドキドキしてた。

漣「あみ・・・？」

「えっっ!漣？」

あみは電気をつけた

漣「まぶしくって!!電気消せよ」

「ごめん。。いつ帰ってきた？」

漣「今日だよ!さっき泣いてたん？」

「ちょっと・・・グスッ・・・」

そう言うと、あみはまた泣き出した

あみは部屋を出ようとした

漣「あみ来いよ」

「でも……」

漣「泣いてる女ほっとける男いないやろ……」

「……うん」

あみは俺が寝ているベッドに座った

時計を見ると夜中の3時だった

漣「何かあった？」

あみは、おもいつきり泣いてた

漣「あみ……おいで……」

俺は手を広げ隣に寝せるように言った

「でも……」

漣「彼氏がいる事は知ってるけど、ほっとけない」

俺は自分でも何を言ってるか分からなかった

あみはゆっくり俺の隣で寝た

俺は泣いてるあみを抱きしめた

大好きだったあみを抱きしめてるのに胸がズキズキした・

抱きしめて分かった、さっき懐かしかった香りそれは、あみの香水の匂いだった

それで俺は泣いてたんだ。

でも今あみは・・・

あみ・・・あなたは誰を思って泣いてるんですか・・・？

―――次の日―――

俺は寝ているあみから離れ部屋から出た

誰もいなく昨日飲んだ缶だけがあつた

まだ翔汰も起きていないようだった

俺はソファ―に座りタバコを吸った

翔汰とあみは俺はタバコを吸い終わったぐらいに起きてきた

翔汰はあみがいる事を知らなかったのかビクビクしてるのと俺とあみを交互に見ながら

俺に近づいて来た

「漣、大丈夫？」

漚「何が・・・？」

翔汰は俺の気持ちえお分かってた

漚「聞いて！昨日じゃなくて今日の夜ね俺が寝ている時あみが襲ってきた」

俺は翔に心配かけないように明るく言った

「はっ！！ありえないし。。」

漚「だってそうじゃん男が寝てる部屋に入って来るとか」

「漚のバーカ！！」

「久しぶりにお前らが言いあってる所見た（笑）
そうだ今日俺等、海パン買いに行くけど、あみは？」

「私は彼氏と会わなきゃ」

翔はヤバイと思ったのか頭を下げた

俺はそれに気付いた

漚「いいな～～彼氏！俺も彼女ほ～～い！
外でタバコ吸ってくるわ」

俺は逃げるように外に出た

第14話・・・殴り

やっぱ、あみには彼氏がいる・・・

俺が外でタバコを吸っていると翔汰が来た

「海パン買いに行こう」

滯「行くか」

俺が海パンを選んでは、翔は女と話していた

俺は白のベースにドクロが大きく書いてある海パンを買った

翔汰は女2人を連れ俺の所に歩いてきた

「滯だ！！なんで!？」

そこに居たのは愛と彩耶香だった

滯「よく久！昨日帰ってきたんだ」

愛「マジ！！電話ぐらいちょうだいよ」

滯「ゴメン今日会いに行こうと思ってたんだよ」

彩「今日みんな秀仁の家に行くから今から行こうよ」

翔「いいねー漣行くぞ！」

漣「そうだな！皆に会いたいし！」

俺達は店を出て歩きだした

愛「漣変わったねー」

漣「全然変わってないし！！！」

俺達はギャーギャー言いながら歩いていた

「ねえーあれあみだよね！？！？！？」

彩耶香はビックリしてるような顔で言った

俺は彩耶が見てる方を見ると男に殴られていた

俺はとっさに、あみの方に走り男を殴った

ポコッ！！

俺等が殴りあっていると、あみが男の前に立った

「漣やめて……。殴らないで……」

あみは男をかばった

俺があみの口元から出てる血を拭き取ろうとしたら、あみは一歩後

ろに引いた

「触らないで！・・・凛行こう」

あみは、その凛と手を繋ぎ歩いていった

俺が悪いのか・・・？

俺はただ、あみが殴られてから助けたのに

そんなにあみは俺の事が嫌いな・・・？

立ち尽くしていると俺の方に翔汰達が走ってきた

「漣氣にするな行くぞ」

今の俺には何も聞こえなかった

翔汰は俺の手首を握った

漣「触んな！！」

俺は翔汰の手を振り払った

翔汰はビックリしていた

漣「あっゴメン！俺帰るわ」

俺はそれだけ言って自分の家の方向に走った

第15話・・・日記

家に着き部屋に入ると全然変わってなかった

でもベッドの上の方には沢山の夜空の写真が貼ってあった

そして、その上にあみの字で『漣はこの空を見てる?』と書いてあった

写真を一枚取り日付を見ると俺が施設に行った日から毎日の空だった

その隣には一冊のノートが置いてあった

俺はそのノートを手に取り開いた

そのノートにはビッシリ字が書いてあった

—————

2004年7月21日

今日は漣が施設に行った

このノートは漣が帰ってくるまで書こう

でもなんか涙が出てくる・・・

漣・・・私を1人にしないで。

涙を止めようとしても止まらないよ

いつもだったら私が泣いてたら抱きしめてくれたじゃん!

早く抱いて

漣のバカ!!! 私を1人にしないで。。

|||||

|||||

2004年8月24日

今日は滯の誕生日。

おめでとう。。。。

去年の今は皆で楽しんだのに。

今の私は去年と逆な気持ちだよ・・・

来年の今日はもう滯は私の隣にいるかな??

滯・・・

大好き大好き大好き大好き大好き

|||||

全部のページに泣いたような跡があった。

俺はどんどんページを開いた

最後のページは。。

|||||

2005年7月21日

今日翔汰の家に行くと滯がいた・・・

今は凜が好きなの・・・

でも滯に優しくされるとダメだよ

絶対濡の方に行っちゃう。

濡に抱かれた時の温もりは好きだったな

今からは濡に冷たくしていく

濡ありがとう。

――――

俺は泣いていた。

だからあみは、さっき俺に冷たくしたの・・・？

でもこんな思いをさせたのは俺なんだよね・・・

ゴメンな今まで1人にして。

でも今は大切な人がいるんだね。

幸せになれよ。

あみが幸せなら俺はそれでいい・・・

俺こそありがとう。

あみには感謝する事が多いよ。

俺はベッドに横になって外を見ると星が綺麗だった

あみはこの空を見てる・・・？

今になって、あみの気持ち分かったよ。

悲しい	悲しい
・	・
・	・
・	・
・	・
・	・

第16話・・・迎え

次の日俺は海に行く準備をした

「今日あみ来るのかな・・・」

俺はそんな事を考えてると外からクラクションがなった

外に出ると黒い車が一台あった

車には翔汰と翔汰の兄の敦サンがいた

敦サンは俺より4つ上だが友達のように仲がいい

「早く乗れよ」

助席から翔汰が顔を出して言った

「なあ今から、あみを迎えに行くけどいい・・・？」

漣「いや普通にいいけど（笑）・・・」

今日はあみも来るんだ・・・

俺は自分の気持ちを今日から変える事にする。。

あみとは昔の幼馴染の関係に戻ろうと思った。。

車を走らせてすぐ、あみの家の前についた

「漣が迎え行く!？」

「漣が行けよ〜♪」

敦サンは俺があみの事を好きっという事しか知らなかった

漣「俺が行くよ〜♪」

俺は玄関の前に行くときドキドキしてた。

昔は毎日のように来ていた場所なのに。

ピンポーン

インターホンを押すと、あみのお母さんがすぐ出てきた

「あーーら! 漣じゃない。。。どうかしたの!？」

漣「おばちゃん元気そうだね(笑) 今日さー海に行く事になってるから迎えに来た!」

「嘘〜まだあみ寝てるよ・・・?」

漣「マジで!! 今10時だよ。」

「あの子このごろ起きるの遅いのよ。漣起こしてきてくれない!？
おばちゃん今洗濯してて」

そう言うとき、おばちゃんは走って奥に行った

俺は靴を脱ぎ階段をのぼり、あみの部屋に入った

あみは寝息をたて気持ち良く寝ていた

漣「あみ・・・」

俺はあみの体を揺らした

漣「お～～い起きろよ!」

「ZZZZ・・・」

あみの寝顔は可愛かった

漣「・・・おい! あみ早く起きろよ。置いていかれるぞ」

「・・・もう・・・ちよつと」

あみはまだ俺の存在に気付いてないようだった

漣「そっか～ならお前海に1人で行けよ!」

「――ガバ――」

あみは思いつき起きた

「ちよつと待って・・・よ!・・・・・・漣・・・?」

あみはビックリしていた

滯「俺、部屋の前で待つとくから早くしろよ。。遅かったら置いて行くから!」

「分かった〜〜!早く出て出て」

俺は部屋から出てドアの前に座った

・・バタ・バタ・・・

あみが急いでるのが分かった。。。

ードンッー

俺の背中に激痛が走る

滯「いって〜〜〜〜!」

「ゴメン本当にゴメン!!」

あみが急いで出てきたおかげでドアが俺の背中に激突

俺は無言で家を出て車に乗った

「滯あみは?」

滯「さ〜〜?」

「えっ〜〜?連れてこいよ!。。。って来たじゃん」

あみは走って車に乗った

「ホントごめんね?？怒ってる……よね?？」

漣「怒ってないよ。。」

俺はそう言いながら窓を眺めていた

「本当ごめん・・」

漣「分かった♪ならジュースおごってくれたら許す・・かも!？」

「おごるから。。。」

漣「やった~~~~~♪♪♪」

俺は海に着くまでずっと1人で騒いでた

「お前今日ウザイ。。。」

翔は俺に冷たくそう言った

敦サンも俺に

「海着いたらかまってやるから落ち着け!」

って言ってきた

「ほんと今日の漣ウザイ!！」

あみまで。。。

俺は皆から言われた事がショックで寝る事にした

3人は笑いながら滯がいじけたなど言っていた。

第17話・・・出会い

いつのまにか深い眠りについていた

俺はどこかに立っていた・・・。

周り一面暗かった

でも右を見ると、あみがいて誰かの方に歩いていた

左には眩しいくらいの光。。

光の奥には人が1人立っていた

俺はどっちに歩けばいいか立ち尽くしていた

・・・夢・・・？

「・・・れ・・・い」

ん・・・？

「滞！・・・！海着いたよ」

目を覚ますと、あみが俺の体を揺らしながら起こしていた」

やっぱり夢だったんだ・・・

あの夢はなんだったんだろう・・・

あの光は何・・・？

あの人は・・・

俺は疑問をいだいてた。。

「漣行くぞ」

そう言って翔汰は先に行った

海には沢山のダチ。。

まだ俺が帰ってきてる事を知らない

沢山のダチの中に知らない女がいた

あみは、その女の所へ走って行った

その女は、あみの友達だろう。。

漣「お～～～い」

俺が走って行くと皆驚いていた・・

秀「えっ漣！！それとも幽霊？」

漣「人を殺すなよ」

皆が俺に集まってきた。。

やっぱこいつらと居ると落ち着くな〜♪

翔「漣こいつが新しいダチ」

翔汰が紹介したのは、さっきあみと居た人

漣「よろしく♪俺の事さー漣って呼んで〜」

「うんヨロシク☆☆私は美希だよ〜」

美希は髪はストレートで暗めの茶に明るめの茶のメッシュが入って
いた

見た目は思いつきりギャル

俺の周りってギャルばっか・・・。

俺達は水着に着替えて更衣室から出た

「あち〜」

漣「女達遅くねえ〜」

翔「女の子は忙しいんだよ」

「・・・・・・」

女が来ないと盛り上がらない（笑）

キヤーキヤー

女の集団が出てきた

その後ろからは見た事があるような人が歩いてくる。。

あれは・・・あみの彼氏

あみは気付いたのか男の方に行って俺等から離れた所で遊んだ

秀「なあゝ早く海はいろいろ♪」

「入ろうゝ♪」

俺はあみが気になったけど見ない事にした。。

俺は翔を抱え海に投げ飛ばした

どれぐらい遊んだだろう。。

皆あきたようで砂浜で体を焼くやつもいれば遊んでる奴もいる

敦「喉かわいたゝゝ滯!！」

滯「なんで俺!？」

「俺もゝ」

「私も」

皆が俺にそう言いだした

漣「良いけど一人で・・・？」

愛「なら～～美希行ってくれば♪」

美「なんで私」

愛は美希引っ張って2人で何か話してた

美「漣～～行こう」

漣「マジで！！なら行くか」

俺は美希と2人で近くのコンビニまで歩いて行く事にした

漣「ねぇ美希さ俺と行くの嫌だった？」

「そーいう訳じゃないけど。。」

漣「なんだ！良かった～初対面から嫌われたかと・・・」

「バカじゃ～～」

漣「バカって・・・」

「早く～コンビニ着いたって」

俺達はコンビニに着いた

今はまだ美希とこの後何がおこるか分からないまま。

第18話・・・海

俺と美希はコンビニに入る

「ねえ、お酒飲みたくない？」

漣「あんさあ、ここで買ったらダメじゃん！それもまだ昼」

「やっぱ無理、！？」

漣「無理無理！昼飯も買っていった方がいいと？」

「いらないよ、♪♪女全員で作ったから。」

漣「それって美希も作ったん？」

「作ったよ、♪♪」

漣「え・・・毒とか入れてないよな（笑）」

「最低・・・！漣にもう食べさせない」

美希は怒ったようにプイッと顔をそらした

漣「ゴメン！！食べさせて」

俺は手を合わせながら謝った

初対面なのに気軽に話せた

コンビニの外に出て皆がいる海に向かった

海に着くまで2人は話しながら。。

海に着くまでに2人は仲良くなっていた

翔「おかえり〜♪お前ら仲いいな〜」

滯「え〜仲良くないし!」

美「本当に仲良くないし」

ぱっあみに目をやると、こっちを悲しそうな目で見ていた

なんでそんな目で見るん・・・?

でもすぐ彼氏とラブラブしはじめた・・

そんな俺に気付いたのか美希が俺の顔を覗いてきた

「どうかした・・・」

俺はドキッとした・・・

だって。。。言い方があみに似ていたから・・

滯「どうもしねえ〜よ!早く飯食おう」

俺等は飯を食って夜まで海に居て花火をして帰った

あみは花火をする前に帰っていった

俺等はそれぞれ解散した・・

その日から美希とメールする事が多くなった

そして俺も美希の事を考える事が多くなった

あみと似ているから・・

でもあみと美希は違う人。。。

あみとは全然話さなくなった

あみは俺からどんどん離れて行ってる

俺も離れなきゃ。。

俺はどんどん、あみじゃなく美希の事を思ってた

――――

受信

美希

ねえ、今から皆で飲みたいけど
滯の家で飲んでいい???

――――

俺はすぐ返信した

――――

いいよ→→

――――

それから30分ぐらいして皆が集まってきた

秀「早くのも～～」

滯「お～～→→→→」

俺等は3時間ほど飲みまくった

もう夜中1時になっていた・・・

皆が帰っていったでも美希は寝ている

「ZZZZ・・・」

あみはぐっすり寝てるみたい。。

俺は起こさないで酔っている美希をベッドに連れて行った

ベッドにおろした揺れで美希はおきた

「あつゴメン・・・」

漣「疲れたど？寝な」

美希に布団をかけ俺はベッドの下で横になる

「美希が下で寝るから漣がベッドで寝て」

漣「何言いよると女は体冷やしたらダメしょっ」

「なら漣こっちで寝よ」

えっ・・・・・・・・

俺は嬉しかった。。。。

でも美希はどんな気持ちなの・？

漣「えっ俺マジで床でいいしっ」

「ダメだよ風邪引くよ」

今日はいつもより以上に寒かった

まだ9月なのに・・・

俺はあみから離れる事に決めた

漣「しゃーねーな!!」

俺は美希の隣で寝た

第19話・・・展開

美希と少し離れて寝る

俺は暗いところに立っていた

この間のと一緒の夢

あみは彼氏と手を繋いでいた

俺は少しずつ奥にいる人の方へ歩いてた・・・

あの人は誰・・・？

もうちょいで見える・・・。。。

バツ！！

起きると朝の11時だった

あの人誰だよ・・・

頭イテーーーーー

昨日飲みすぎた・・・

隣にはまだ美希が寝ている。。。

「シャワー浴びよう」

俺は美希に布団を綺麗にかけ風呂場に行く

ボーとしながらシャワーを浴びる

今日も夢を見た。

前見た夢と一緒に夢

でも俺は一步一步光の方へ歩いてた

あの光は美希かな・・・？

このごろ毎日と言っていいほど美希の事を考えてる

俺たぶん美希の事スキなんだよな・・・

シャワーを浴びて風呂から上がると

「ちよつと・・・」

美希な顔が赤かった・・・

濡「なんだよ・・・顔赤いぞ熱でもあるん」

俺が額を触ろうとすると

「そうじゃなくて・・・」

漣「ん・・・？」

美希は俺の体を見ていた

俺は上半身裸で風呂から出てきた

だから・・・顔が赤いんだ

漣「ゴメン（笑）癖なんだよ」

「ぼろろか！」

美希はベッドに潜り込む

俺は服を着て美希の所に行った

漣「美希ちゃんおもしろ」

俺はベッドに隠れている美希に言った

美希はベッドから出てきた

俺はベッドに横になっていたから美希との顔の距離が10センチぐらいだった

俺はゆっくり美希の頭の後ろに腕を回し自分の胸に引き寄せた

美希は驚いてた

あみには彼氏がいる

だから美希が好きって訳じゃない

今は本当に美希が好き

俺はでこにキスしホッペへと移した

唇まであと少し・・・

美希は俺の事スキなのかなあ・・・？

俺は唇にキスをする事を止めた

漣「ゴメン・・・急にキスして。」

「ねえ・・・・・・・・」

美希は俺の目をまっすぐ見ている

漣「ん？」

「漣ってあみの事スキなんでしょ？」

漣「えっ・・・？」

「だから、あみの事スキでしょ？」

美希の目は真剣だった

漣「スキだったよ・・・でも今は美希が好きなんだ！」

俺はハッキリ言った

だってマジでスキだから。

「私も好き。。」

かなり嬉しかった

「私あみみたいに可愛くないけど漣とつりあうように頑張るから」

漣「頑張らんでいいよ！今の美希がスキなんだし、かなり可愛いから」

俺は自分の髪をクシャクシャにしながら言う

俺は軽く美希の唇にキスをした

漣「ねえ俺の第一印象どうだった？？」

「えっカッコイイと思ったしケンカ強そうとかガラ悪いとか・・・（笑）」

え・・・俺ってそんなガウ悪いか・・・？

漣「他にないのかよ」

「うっくん優しそうだと思った、でも時々悲しそうな目をしてると思った」

えっ俺が・・・悲しそうな目！！？

あみの事を思ってたからだよね。。。

「でも今は目に元気がある！」

漣「美希と居れるからだよ・・・」

美希が居たから俺は変わったんだ。。

美希と出会わなければ今も、あみの事をずっと考えて苦しんでたかも

あみ俺は新しい人とを好きになりました

隣を見ると

第20話・・・夢

隣を見ると・・・・・・・・

あみ؟؟？

なんでここは俺の家だよな。。

「あっ・・・ゴメン。。勝手に入って・・・」

あみは海で見た時と同じように悲しそうな目をしてた

滯「どうかした・・・？」

美希は俺と手を力強く握った

「なんでもない・・・ゴメンね！2人ともラブラブじゃん」

あみは笑っていた。。

でも・・・

あみは部屋から出る時泣いていた・・・

あの涙はなに？？

事実をするのはずっと後の事・・・

「何だったんだろうね？あみ・・・」

滯「そうだよな～分からね」

滯「どうするこのまま寝る？それともどっか行くか？」

「寝てからどっか行く～～♪」

俺は美希を優しく抱きしめ少しの時間寝ることにした

また・・・夢を見た

光の方へ歩き出した俺は誰かと手を繋いでいた

誰だろ～～やっぱ美希かな！！

後ろからは泣き声が聞こえた

この声はあみ・・・

なんで泣いてるの・・・？

振り向こうと思ったけど、ここで振り向いたらダメな気がした。

俺は耳を押さえた

「滯ゝおきて!!」

滯「ん・・・」

俺は目を覚ます

「遊び行こう」

滯「うん・・・」

俺はさっきの夢の事を考えてた

なんで泣いてたんだろう・・・

「滯!!」

美希が俺の体をゆすった

滯「ゴメン・・・夢の事考えてた♪」

俺は明るく言った

滯「どこに行くか?」

「う～～～ん海がいい!」

滯「いいけど寒いぞ！」

「いいよ♪」

滯「なら先輩にバイク借りていくか」

第21話・・・寒い海

2人は歩いて先輩の家に行った

漣「先輩バイク貸して〜♪」

「無理！！今日デートだから使うんだわ・・・」

そう言って先輩は家の中に入った

漣「どうしょっか〜寒いし歩くのは無理だな〜」

「うん・・・」

パッパ

後ろからクラクションになる

振り向くと敦サンがいた

「お前ら何してんだ〜」

漣「バイク借りに来たんですけど無理でボーっとしてます（笑）」

「どっか行くん？」

漣「海行こうかな〜って」

「俺が乗せて行っであげるよ」

漣「マジで！あんがと〜」

2人は車に乗った

外の寒さと逆に車は温かった

敦サンはバーで仕事してて海を通して仕事場に行く

「ねえ聞いているい・・・？」

漣「えっ・・・？」

美希は外を眺めていた

「美希ちゃんと付き合ってるの？」

漣「そうだよ♪」

2人は目を合わせる

美希は嬉しそうな顔だった

たぶんっていうか絶対に俺の顔も赤くなってる・・・

「お前ら幸せそうだな（笑）」

漣「当たり前！！！」

俺は美希と手を繋ぐ

「ねえ漣、海見えたよ♪」

「お前らここでいいだろ！」

漣「先輩ありがとうございました（笑）」

俺等は車から降り浜辺にあるいた

夏は人がたくさんいるのに今は誰1人もいなかった

漣「何する？海に入るのは無理やしな（笑）」

「当たり前じゃん！今入ったら死んじゃうよ」

漣「なら座るか」

「うん♪」

漣「寒いだろ！こっちおいで」

俺は美希を自分の足の上に座らせた

この時間はかなり楽しかった

第22話・・・家

2人は静かに波打つ海を見ていた

漣「寒くないか？」

「大丈夫だよ！でも漣は鼻ちょっと赤い（笑）」

美希は俺の鼻を触る

漣「触るなよ！美希だって赤いし」

俺も美希の鼻を触った

2人は笑いながら向き合った

俺はゆっくり手を回し、ゆっくり顔を近づけキスをした

優しく抱きしめる

美希を抱きしめると、昔抱いたあみの体温が遠くなっていく

俺等は体重がかかりそのまま倒れた

「ハハハハ~~~~」

漣「何笑ってんだよ」

「だって滯の可愛いんだもん♪」

滯「可愛いって……ってか寒くない？」

「寒い帰る……？」

滯「そうだね♪あんなくどうやって帰るの？（笑）」

俺達は帰る時の事を考えてなかった

滯「タクシーでも呼ぶか！」

俺は電話をした

タクシーは10分ぐらいして来た

そのままタクシーに乗った

滯「今日どうする？帰る？」

帰らせたくないんだよな

「泊まりたい！」

滯「なら泊めてあげるよ（笑）」

ずっと手を繋いだまま家に入りベッドに入った

滯「おいで……」

美希は俺の腕に頭をおいた

「おやすみ」

漣「おやすみ♪今日いい夢見れそう」

優しく美希を抱き布団をかけ寝た

―――次の日―――

頭いてくくくく

ヤバイ・・・・・・・・・・

「漣どうかした？」

俺の異変に気付き美希が声をかけてきた

漣「なんかヤバイ・・・」

俺はベッドから起き上がろうとした

フラッ・・・・・・・・

めまいがした。。

「大丈夫???」

滯「頭いてーんだよ・・・」

美希は俺の額を触る

「熱い・・・滯熱あるよ!」

そう言って美希は体温計を持ってきた

「38度って・・・昨日寒かったからかな?」

滯「たぶん・・・バカは風邪ひかんって言うけど（笑）」

俺は頭の痛さを我慢しながら笑った

それから美希はお粥を作ってくれたり頭においてるタオルも換えてくれた

昼過ぎぐらいに美希の電話がなった

「親からだった・・・今から帰ってこいだって」

滯「そうだよな昨日何も言っていないもんな」

「じゃ1回帰ってまたくるね♪」

滯「ゴメンな送っていけなくて・・・」

「いいよゝ寒くないように寝てるんだよ！」

滯「おう！！また後からな。」

俺は美希の腕をひきキスをした

いつもより長いキスを・・・

この時、俺が風邪をひかなかつたら・・・

家まで送っていったら・・・

第23話・・・悲劇

やっぱ頭痛い・・・

俺はゆっくりベッドに座りお粥を食べた

漚「うまい・・・」

初めて彼女の手作り料理を食べる

食器を机に置きベッドに戻った

♪プルルル♪

ベッドに寝ようとした時、携帯がなった

ー着信…唯サンー

唯サンとは美希のお姉さん

1回美希の家で遊んだ時にあった事がある。

唯サンから電話っ珍しいな・・・

漣「もしもし・・・」

「漣くん・・・？」

漣「そうですけど。。どうかしたんですか？」

「美希が・・・」

漣「美希になんかあったんですか!!」

「〇〇病院にいるんだけど、さっ・・・」

俺は最後まで聞かずに電話を切った

美希が病院・・・・・・・・。

なんで・・・・・・・・

さっきまであんな元気だったのに・・・

俺はすぐベッドから降り病院まで走った

病院までは10分ぐらいしたら着く

病院に着くと玄関に唯サンが立っていた

滞「美希どこにいるんですか!？」

「病室だよ・・・行こう」

唯サンは今まで泣いたようだった

俺は唯サンの後についていった

唯サンが立ち止まったドアには美希の名前が書いてあった

「入りな」

俺はすぐにでも入りたかったけど足が動かない

入りたいくない。。。。

唯サンはドアを開けてくれた。

病室には呼吸器をつけた美希の姿

俺はゆっくり病室に入る

病室には美希の両親がいた

俺は美希の所に行った

なんで・・・

さっきはあんなに元気だったのに

滞「おい！美希。。何してんだよ」

美希の手を握りながら叫んだ

第24話・・・病院

それから30分ぐらいたった時、唯サンが俺を呼んだ。

俺と唯サンは病室から出てソファアに座った。

唯サンはゆっくり話し始めた。

「美希がね信号で止まってて歩きだしたら信号無視された車にひかれたんだって・・・」

唯サンは泣いてた・・・

漣「俺のせいです・・・。俺が・・・昨日・・・泊めたから・・・」

「自分の事そんな責めないで・・・漣クンの話してる美希は楽しそうだったし・・・」

「今日はもう帰りな！ずっと居ても今日は目覚めないらしいから・・・」

俺はもう一回病室に入った。

漣「ゴメンな・・・美希。俺が送ってたら良かったのにな・・・」

また明日くるから起きとけよ!」

俺は美希にキスして病院から出た

俺は家に入りベッドの前に立ったと一緒にそのままベッドに倒れた

目を覚ますと朝だった

まだ熱があるのか頭が痛くボーっとする

まだ美希と付き合って3日しか経たないのに。。

俺はずっと考えていた美希は俺と付き合っていて幸せだったか・

俺は美希な好きなお菓子を買い病院に行った

美希はまだ目を閉じたままだった・

病室には誰もいなかった

美希の寝ている顔を見ると海に行った時の顔を思い出す。

あの時は楽しそうだったのに・・

俺はその日から1歩も部屋から出なくなった

部屋から出なくて5日経った日電話があった。

相手は唯サン

唯サンって事は美希の事

俺はすぐ電話に出た

漣「もしもし〜？」

「美希が目覚めましたよ〜今元気だから来て！」

やった→→

俺はすぐ部屋を出て病院に行った

第25話・・・ショック

病院に着き病室に行くと病室の前には美希の友達が沢山いた。

皆、美希が元気になって嬉しそうだった

俺はゆっくり病室の扉を開けた

扉を開けると楽しそうな美希の笑顔

久しぶりに見た美希の笑顔にドキドキした

俺は美希がいるベッドに近寄る

滯「美希」

「?」

いつもなら俺が美希を呼ぶと笑顔で返事するのに今日は・・・

「誰？」

それが美希が俺に言った言葉

誰??

俺は美希の彼氏だよな・

キスもしたし・・・・

澤「美希何いってんだよ!」

ただ俺を困らしてるだけだよな♪

俺は美希の手を握った

「触らないでよ! マヂ誰?」

えっ・・・

意味分かんない。

俺は立ち尽くしていた

周りに居た美希のクラスの友達もビックリしたのか困っていた

トントン

後ろから誰かに叩かれた

振り向くと病院の先生がいた

「後遺症が残ったみたいね・」

後遺症??

「それも後遺症であなただけ忘れてるみたい・・・」

俺の事だけ・・・

なんでだよ!

「美希ちゃん、この人の事知ってる?」

先生は俺を指差しながら言った

漣「知ってるよなく美希!」

絶対覚えてる。。

俺の事を美希が忘れる訳がない!

でも返事は・・・

「知らない・・・?誰ですか??」

え・・・

漣「美希何いってんだよ!俺は美希の彼氏だろ」

「そうだよ!あんな仲良かったじゃん美希!」

美希のクラスメイトの人も言ってくれた

第26話・・・別れ（前書き）

遅くなつてすみません・・・

第26話 ・ ・ ・ 別れ

俺はショックのあまり病院を出た

滯「意味わかんね」

俺は行くところもなかったので病院の外のベンチに座った

寒い・ ・ ・ ・ ・

もし美希が事故ってなかったら寒くなかったんだろーな・ ・

俺のせいだよ・ ・ ・ ・

俺が考えてると後ろから声がした

後ろを向くと美希の友達から入り口からこっちに向かってきていた

友達は俺を見るなり、困ったような顔をして帰って行った

俺は下から美希の病室を見ると窓から美希がこっちを見ていた

いつもの様な笑顔ではなかった・ ・

その日から俺は美希に会いにいかなくなった

美希が俺を忘れたから行かなくなったんじゃない

嫌いにもなってない

美希が事故にあったのは俺のせいだから・・・

自分なりの反省だった・・・

あれから何日たっただろう、ずっと俺は部屋にいた

その日久しぶりに翔汰が俺と遊びたいって言ってきた

正直遊びには行きたくなかったけど翔汰達にも心配かけたから行く事にした

いつものメンバーで集まりカラオケに・・・

今日は楽しもう

翔「濡が元気ないと俺も元気なくなるじゃん！」

濡「ゴメン・・・歌うかー♪」

2時間ぐらい歌い外に出た・・・

プルルル♪

電話がなった

受信ー唯サン

俺は出る気にもなかったが気になって出た

漣「もしもし」

「久しぶりー美希おとといから退院しとよーでも記憶はまだ・・・」

漣「そうっすかー良かったすね！美希におめでとうって言ってやってください」

俺は明るく話した

「美希と会う？」

漣「美希が思い出すまでいいですよー」

「でも美希が会いたいって・・・彼氏の事覚えてないって最悪だつて・・・」

漣「美希がそう言ったんですか？」

「そうだよ・・・今から会える？」

俺は迷った

唯サンに返事をし電話をきった

俺は歩きだした・・・美希の元に・・・

美希は家の前に立っていた

漣「よっ！」

「こんばんわ・・・」

滯「どっか行こうか？」

「あ・・・はい」

昔の美希とは全然違った

歩いてると1つの公園が見えた

滯「公園で話す？」

「はい」

俺と美希はベンチに座った・・・

「あの～滯くんは私の彼氏なんだよね？」

滯から滯くんになっていた・・・

滯「そうだよ～手つないだりキスもしたし俺の事も滯って呼んでた」

俺は言いながら泣いていた

「ごめん・・・覚えてなくて」

滯「美希のせいじゃないよ・・・俺が悪いから」

「グスッ・・・」

隣を見ると美希が泣いていた・・

漣「どうした？」

「だって最悪だなんて思ってた・・」

俺はゆっくり美希を抱きしめた

美希は困ったような顔をしてた

漣「今だけこうさせて・・」

「うん」

それから何分たったか分からなかった

漣「帰ろうかー」

体をはなし言った

「うん」

美希の家まで無言で歩いた

いつもなら、すぐ着いた家が長く感じた

家に着くと美希は家の中に入ろうとした・・

漣「美希・・・！」

「うん?？」

美希はこっちを向き歩いてきた

漣「今までありがとう・短かったけど楽しかったよ

このまま付き合っても美希は幸せじゃないと思うから別れよう」

「ごめん・・・本当に・・・」

漣「俺こそゴメンな! かなな楽しかったよ! 幸せになれよ!!」

「うん・・・」

漣「最後まで笑い顔になれよ! 俺は美希の笑った顔が好きだったんだから」

「分かった、私こそ今までありがとう。。漣も幸せになってね♪」

美希はゆっくり家に入っていた

俺は久しぶりに美希の笑顔が見れた事が嬉しかった

それと最後に漣って言うてくれた事・・・

俺は美希の幸せを願って家に帰った・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0374b/>

幼馴染ー番外編

2010年10月17日02時56分発行